

若い人に昔のこと、戦争のことをお話ししよう!

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.221

2013(平成25)年 8月 9日(金)発行



▲国見団地にあった「原紡」は昭和20年2月16日と、8月9・10日、空襲されました。

○68年前の1945(昭和20)年8月9日午前11時2分長崎に原爆投下

●実は8月9日、南相馬市原町区にも空襲がありました。本陣前から馬場地区にあった「陸軍飛行場」と現在の国見団地にあった「原紡(原町紡織工場)」、「原ノ町駅・機関区」や民家が空襲され、3名が犠牲になりました。●翌10日も「原ノ町駅・機関区」が空襲され6名が死去。原ノ町駅の東にあった「帝金(帝国金属工場)」、相馬農蚕学校(相馬農業高校)や原町小学校(原一小)も空襲されました。

<二上英朗著『原町空襲の記録』・『原町市史』11巻 参照>

◇戦争を風化させないため、「私の・家族の戦争体験」を語り継ぐ時です。原稿をお寄せください。

なかなか、取材してもらえないニュースです!

私たちの3.11東日本大震災・原発事故の体験 30

相馬高校放送局 “JCJ(日本ジャーナリスト会議)特別賞”受賞 “第60回NHK杯全国高校放送コンテスト・テレビドキュメント部門”優勝

■相馬市の県立相馬高校放送局は、演劇『今伝えたいこと(仮)』などで、原発事故による被害や放射能の恐ろしさを訴えて活動してきましたが、「勇気ある行動」と評価され、2013年度日本ジャーナリスト会議(JCJ)特別賞を受賞。■1958年度の賞創設以来、高校生の受賞は初めて。表彰式は8月10日、東京・内幸町日本プレスセンターホールで、琉球朝日放送、NHK、北海道新聞、布施祐仁、大石芳野さんと肩を並べての表彰です。

■また、7月23~25日東京渋谷のオリンピックセンター・NHKホールで開催の、第60回NHK杯全国高校放送コンテスト・テレビドキュメント部門でも、作品『相馬高校から未来へ』(震災や放射能に翻弄される生徒たちの不安や怒りを映像でまとめたもの・8分)が、全国547作品の頂点に立ち、第1位の優勝・文部科学大臣賞を獲得。相馬高校としてNHK杯全国優勝は初めてです。

■さらに、原町高校放送部も同部門で『静かな・・・』という作品が優良(第4位)に、磐城高校放送部が創作テレビドラマ部門で『恋愛方程式』が優勝。被災地の福島県浜通りの高校生が大活躍です。

<JCJ特別賞受賞理由>

3・11後の福島には現代日本の矛盾が凝縮されている。原発事故や放射能について自由に話し合うことがタブーとされている。相馬高校放送局の生徒たちは音声・映像、演劇などの作品群を通して、その「禁」を打ち破った。「安全」「収束」の声に疑問をなげかけ、社会的現実を討論し見極め、今言わなければならないことを、心の奥底の不安、怒りとして表出した。日本の高校生の可能性を示す言論活動として評価される。

「原発さえなければ 私たちもこんな思いしなくても 済んだのかもね」



▲今年2013年1月1日『朝日新聞』全面特集で大きく紹介されました。写真中央が、取材された「ふくしま会議」代表理事赤坂憲雄さん(学習院大学教授・福島県立博物館館長)。右から二人目が顧問の渡部義弘教諭(相高出身で在校中は放送局部員・本会会員)。演劇は全国各地から依頼が殺到、直接上演やDVDで発表されています。

—<演劇『今伝えたいこと(仮)』より>

「私の話を聞いてください」
「誰も聞いてくれない」
「子どもの訴えを無視しないでください」
「私は原発周辺の地域は今まで原発のお陰で潤って来たと思う。リスクと引き替えにね。でもそれって私たちの世代が決めたことじゃないよね?」
「もし将来、私たちが他の県の人と結婚して、子供作ったりした時に、福島県の放射能のこと言われたらって・・・将来、子供が出来た時に、その子に障害があったりしたら・・・全部、私たちのせいにされる」



「八月や 六日 九日 十五日 (はちがつや むいか ここのか じゅうごにち)」

8月は特に平和を祈念する月 皆さんの「平和の歌」は？
 たくさんの「平和を願う歌」の中から、よく知られた三曲を選んでみました。

美空ひばりが大切にした反戦・平和の歌

『一本の鉛筆』

作詞 松山善三 作曲 佐藤 勝



- あなたに聞いてもらいたい あなたに読んでもらいたい
 あなたに歌ってもらいたい あなたに信じてもらいたい
 一本の鉛筆があれば 私はあなたへの愛を書く
 一本の鉛筆があれば 戦争はいやだと 私は書く
- あなたに愛をおくりたい あなたに夢をおくりたい
 あなたに春をおくりたい あなたに世界をおくりたい
 一枚のザラ紙があれば 私は子どもが欲しいと書く
 一枚のザラ紙があれば あなたを返してと私は書く
 一本の鉛筆があれば 八月六日の朝と書く
 一本の鉛筆があれば 人間のいのちと私は書く



○昭和12年5月29日生まれの美空ひばりは、横浜空襲の体験があり、持ち歌1,500曲のベストテンの一つに自分でこの「一本の鉛筆」を選んでいました。

○広島平和音楽祭では2度、1974年と、亡くなる前年の1988年は入院中でしたが点滴をしながら歌っています。

○美空ひばりは平成元年6月24日、52歳で死去。しかし今も全国で平和の歌として歌い継がれています。

農具作りに精出す「村のかじ屋」

『村の鍛冶屋』 文部省唱歌

- 暫時(しばし)も休まず 槌打つ響
 飛び散る火花よ はしる湯玉
 轆(ふいご)の風さへ 息をもつがず
 仕事に精出す 村の鍛冶屋
- あるじは名高き 働き者よ
 早起き早寝の 病(やまい)知らず
 永年鍛えた 自慢の腕で
 打ち出す鋤き鍬(すきくわ) 心こもる
- 刀はうたねど 大鎌小鎌
 馬鍬に作鍬(さくぐわ) 鋤よ鉋よ
 平和の打ち物 休まずうちて
 毎日に戦う 懶惰(らんだ)の敵と
- 稼ぐにおいつく 貧乏なくて
 名物鍛冶屋は 日に繁昌
 あたりに類なき 仕事のほまれ
 槌うつ響に まして高し



○昔、小学校時代に習った方も多いと思いますが、昭和52年頃の教科書から削除され、現在はもう、トンチンカンと赤い鉄を打つ「かじ屋」のことも分からなくなっています。相馬地方では昔、農耕馬や野馬追の馬の「馬蹄」のかじ屋さんがあちこちにありましたが。

○三番の歌詞は、人を殺傷する武器を作る「刀鍛冶」ではなく、地域の農民とともに生き、農具や生活用品を作る、頑固で働き者の「野鍛冶」の老職人を歌ったもの。『旧約聖書』イザヤ書を下敷きにしたという説もありますが、まぎれもない「平和の歌」です。

復員兵の父を母と待つ歌

『里の秋』

作詞 斎藤信夫 作曲 海沼 実



- 静かな 静かな 里の秋
 お背戸に 木の実の 落ちる夜は
 ああ 母さんと ただ二人
 栗の実 煮てます 囲炉裏端(いろりばた)
- 明るい 明るい 星の空
 鳴き鳴き夜鳴(よがも)の 渡る夜は
 ああ 父さんの あの笑顔
 栗の実 食べては 思い出す
- さよなら さよなら 椰子の島
 お舟に ゆられて 帰られる
 ああ 父さんよ 御無事でと
 今夜も 母さんと 祈ります



○童謡「里の秋」は、アジア・太平洋戦争が終わり、海外から日本に帰ってくる復員兵を迎える歌です。戦時中に作詞され「星月夜」という歌でしたが、詞に山里や季節を織り込んでいて、メロディーも美しい。

○終戦直後の昭和20年12月24日、NHKラジオの「外地引揚者同胞激励の午後」という番組で、音羽ゆりかご会の童謡歌手川田正子<写真>がこの歌が流れると、NHKに問い合わせや、「いい曲だ」「もう一度」とリクエストの電話が殺到し、番組中にもう一度「里の秋」を歌ったというエピソードもあります。

○作詞者斎藤信夫は、千葉県成東町出身の元小学校教師でした。戦争を賛美する教員だった自分自身に静かな反省を込め、「戦争はいけない」という詞を作ったといわれています。

